

# 湯島の境内

泉鏡花

青空文庫



湯島の境内 (婦系図―戯曲―一齣)

冴返る春の寒さに降る雨も、暮れていつしか雪となり、

こわいろつかい、  
仮声使、兩名、登場。

上野の鐘の音も氷る細き流れの幾曲、すえは田川に入谷村、

その仮声使、料理屋の門に立ち随意に仮色を使つて帰る。

くるわ  
廓へ近き畦道も、右か左か白妙に、

この間に早瀬主税、お蔦とともに仮色使と行逢いつつ、登場。

ゆきき  
往來のなきを幸に、人目を忍びイみて、

仮色使の退場する時、早瀬お蔦と立ち留る。

お蔦 貴方……貴方。

早瀬 ああ。(と驚いたように返事する。)

お蔦 いい、月だわね。

早瀬 そうかい。

お蔭 御覽なさいな、この景色を。

早瀬 ああ、成程。

お蔭 可厭だ、はじめて気が付いたように、貴方、どうかしているんだわ。

早瀬 どうかもしようよ。月は晴れても心は暗闇だ。

お蔭 ええ、そりや、世間も暗闇でも構いませんわ。どうせ日蔭の身体ですもの。……

早瀬 お蔭。(とあらたまる。)

お蔭 あい。

早瀬 濟まないな、今更ながら。

お蔭 水臭い、貴方は。……初手から覚悟じやありませんか、ねえ。内証だつて夫婦です

もの。私、苦勞が楽みよ。月も雪もありやしません。(四辺をす)ちよいとお花見を

して行きましようよ。……誰も居ない。腰を掛けて、よ。(と肩に軽く手を掛ける。)

慥にここと見覚えの門の扉に立寄れば、(早瀬、引かれてあとずさりに、一脚のベン

チに憩う。)

お蔭 (並んで掛けて、嬉しそうに膝に手を置く)感心でしょう。私も素人になったわね。

風に鳴子の音高く、

時に、ようようと蔭にて二三人、ハタハタと拍手の音。

お蔭 (肩を離す) でも不思議じゃありませんか。

早瀬 何、月夜がかい。

お蔭 まあ、いくら二人が内証だって、世帯を持てば、雨が漏っても月が射すわ。月夜に不思議はないけれど、こうして一所におまいりに来た事なのよ。

早瀬 そうさな、不思議と云えば不思議だよ、世の中の事は分らないものだからな。

お蔭 急に雪でも降らなけりや可い。

早瀬 (懸念して) え、なぜだ。

お蔭 だって、ついぞ一所に連れて出てくれた事が無かったじゃありませんか。珍しいんだもの。

早瀬 ……………

お蔭 ねえ、貴方、私やつぱり、亡くなつた親の情が貴方に乗憑つたんだろうとそう思  
いますわ。……こうして月夜になつたけれど、今日お午過ぎには暗く曇つて、おつけ晴  
れて出られない身体にはちようど可い空合いでしたから、貴方の留守に、お母さんのお  
墓まいりをしたんですよ。……飯田町へ行つてから、はじめてなんですもの。身がか

たまつて、生命いのちがけの願ねがが叶かなつて、容子ようすの可い男を持った、お蔭はあやかりものだつて、そう云つてね、お母つかさんがお墓の中から、貴方によく申しましたよ。邪険なようで、可愛あがつて、ほうり放しで、行届いいて。

早瀬 お蔭。

お蔭 でも、偶たまには一所に連れて出て下さいまし。夫婦いっしょになると気抜きぬがして、意地はりもなくなつて、ただ附くつ着ついていたがつて、困こつた田舎嫁いんやめでございます。江戸は本郷も珍めづしくつて見物がしたくつてなりません。——そうお母つかさんがことづけをしたわ。……何なにだかこの二三日、鬱ふさぎ込んでいらつしやるから、貴方の氏神様もおんなじ、天神様へおまいりをなさいまし、私も一所にツて、とても不可いけないと思つて強請ねだつたら、こうして連れて来てくれたんですもの。草葉の蔭でもどんなに喜んでるか知れませんが。

早瀬 堪忍かんにんしな。嘘うそにも誉ほめられたり、嬉うれしがられたりしたのは、私は昨日きのう、一昨日おとといまでだ、と思つているんだ。(嘆息ため息す。)

お蔭 何だねえ、気の弱い。掏すり賊の手伝てんいをしたツて、新聞に出されて、……自分でお役所を辞職した事なんでしょう。私が云うと、月給げいが取れなくなったのを気にするようようで口惜くやしいから、何にも口へは出さなかつたけれど、貴方、この間から鬱ふさいでいるのはそ

の事でしょう。可いじやありませんか。踏んだり蹴たりされるのを見ちや、掏賊だつて助けまいものでもない、そこが男よ。ええ、私だつて柳橋に居りや助けるわ。それが悪けりや世間様、勝手になさいな。またお役所の事なんか、お墓のお母さんもそう云いました。蕙がどんな苦勞でも樂みにしますから、お世帯向は決して御心配なさいますなつて、……云つてましたよ。

早瀬 難有ありがたい、俺おいら嬉しいぜ。

お蕙 女房に礼を云う人がありますか。ほんとうにどうかしているんだよ。

早瀬 馬鹿な。お前のお母つかさんに礼を云うのよ。しかし世帯の事なんか、ちつとも心配しているんじゃない。

お蕙 じや何を鬱ふさぐんですよ。

早瀬 何という事はない、が、月を見な、時々雲も懸かるだろう。星ほどにも無い人間だ。ふつと暗闇やみにもなろうじやないか。……いや、家内安全の祈き禱とうは身勝手、御不沙汰ごぶさたの御機嫌ごけんうかがいにおまいりしながら、愚痴ぐちを云つてちや境内で相済まない。……さあ、そろそろ帰ろう。(立ちかける。)

お蕙 (引添いつつ) ああ、ちよつと、待つて下さいな。

早瀬 何だ。

お薦 あのと、私は巳年みとしで、かねて、弁天様が信心なんです。……ここまで来て御不沙汰を  
しては気が済まないから、石段の下までも行つて拜んで来たいんですから、貴方、ちよ  
つとの間まよ、待つていて下さいな。

早瀬 ああ、行くが可いい、ついで、と云つては失礼だが、お前しのはず不ず忍ずまで行つてはどうだ。  
一所に行こうよ。

お薦 まあ、珍しい。貴方の方で一所なんて、不思議だわね。(顔を見る)でも、悪い方  
へ不思議なんじゃないから私は嬉しい。ですがね、弁天様は一所は悪いの。それだしね、  
私貴方に内証ないしよ々々で、ちよつと買つて来たいものがありますから。

早瀬 お心まかせになさるが可いい。

お薦 いやに優しいわね。よしませうか、私、……よそうかしら。

早瀬 なぜ、他の事ほかとは違ちがう、信心しんごとを止よしちや不可いけない。

お薦 でも、貴方が寂しそうですもの。何だか災難さいなんでもかかるんじゃないかと思つて、私気  
になつて仕つかようが無い。

早瀬 詰つまらん事を。災難さいなんなんか張倒つかす。

お薦 おお、出来でした、宿のおまえさん。

早瀬 お茶屋じゃない。場所がらを知らないかい。

お薦 嬉しい、久しぶりで叱ちられた。だけれど、声に力がないねえ。(とまた案ずる。)

早瀬 早く行つて来ないかよ。

お薦 あいよ。そうそう、鬱陶うつとうしいからつて、貴方が脱だいだ外套がいとうをここに置きますよ。

夜露がかかる、着いた方が可いいわ。

気転ききかして奥と口。

お薦 (拍手かしわでうつ。)

天神様、天神様。

早瀬 何だ、ぶしつけな。

お薦 (それには答えず) やどをお頼み申上げます。

早瀬 (ほろりと泣く。)

お薦 (行きゆかけつつ) 貴方、見ていて下さいな、石段を下りるまで、私一人じゃ可恐こわい

んですもの。

早瀬 それ見ろ、弱虫。人の事を云う癖くせに。何だ、下谷上野したやの一人あるきが出来ない娘むすめじ

やないじやないか。

お蔭 そりや棲を取つてりや、鬼が来ても可いけれども、今じや按摩も可恐いんだもの。

早瀬 可し、大きな目を開いて見ていてやる。大丈夫だ、早く行きなよ。

お蔭 あい。

互に心合鍵に、

早瀬見送る。——お蔭行く。——

.....

はれて逢われぬ恋仲に、人に心を奥の間より、しらせ嬉しく三千歳が、

このうたいっぱいに、お蔭急ぎあしに引返す。

早瀬、腕を拱きものおもいに沈む。

お蔭 (うしろより) 貴方、今帰つてよ。兄さん。

早瀬 ああ。

お蔭 私は……こつちよ。

早瀬 おお早かつたな。

お蔭 いいえ、お待遠さま。……私、何だか、案じられて気が急いで、貴方、ちよつと顔

を見せて頂戴（背ける顔を目にして継すがる）ああ（嬉たのしそうに）久しぶりで逢ったようよ。  
 （さし覗のぞく）どうしたの。やはり屈託くつたくそうな顔をして。——こうやって一所に来たのは  
 嬉しいけれど、しつけない事して、——天神様のお傍そばはよし、ここを離れて途中でまた、  
 魔まがさすと不可いません。急いで電車で帰りましょう。

早瀬 お前、せいせい云って、ちと休むがいい。

お蔭 もう沢山。

早瀬 おまいりをして来たかい。

お蔭 ええ、仲な町まちの角から、（軽く合掌す）手を合せて。

早瀬 何と云ってさ。

お蔭 まあ、そんな事。

早瀬 聞きたいんだよ。

お蔭 ええ、話すわ。貴方に御両親はありませぬ、その御両親とも、お主とも思います。

貴方の大事なお師匠さま、真砂町まざちようの先生、奥様、お二方を第一に、御機嫌よう、お達  
 者なよう。そして、可愛いお嬢さんが、決けして決けして河野こうのなんかと御縁組なさいませ  
 んよう。

早瀬 それから。

お蔭 それから？

早瀬 それから、……

お蔭 だって、あとは分つてるじゃありませんかね。ほほほほ。

早瀬 (ともに寂しく笑う) ははは、で、何を買って来たんだい、買ひものは。

お蔭 (無邪気に莞爾々々しつ) いいもの、……でも、お前さんには気に入らないもの、

それでも、気に入らせないじゃおかないもの、嬉しいもの、憎いもの、ちよつと極きまりの

悪いもの。

早瀬 何だよ、何だよ。

お蔭 ああ、悪かった。……坊やお土産を待つていたんだよ。そんなら、何か買って上

げりや可よかった。……堪忍おしよ。いい児こだねえ。

早瀬 可いいから、何を買ったんだよ。

お蔭 見せましょうか、叱らない？

早瀬 ……………

お蔭 叱ちつたつて、もう買ったんだから構かまわない、(風呂敷より紙しづつみを出す) 鬚まげ形がた

よ、円鬚まるまげの。仲町に評判な内があるんですわ。

早瀬 鬚形を、お蔭。(思わずそのつつみに手を掛く)俺おれの位牌いはいでも買や可いいのに。

お蔭 まあ、お位牌はちやんと飾つて、貴方のおふた親に、お気に入らないかも知れないけれど、私や、私ばかりは嫁の気で、届かぬながら、朝晩おもりをしていますわ。

早瀬 樹から落ちた俺の身体からだだ。……優しい嫁の孝行で、はじめて戒名が出来たくらいだ。

俺は勘当されたツて。……何をお前、両親がお前に不足があるものか。——位牌と云うのは俺の位牌だ。——

お蔭 ええ。

早瀬 お蔭、もう俺や死んだ気になって、お前に話したい事がある。

お蔭 (聞くと齊ひとしく慌あわしく両手にて両方の耳を蔽おおう。)

早瀬 ちよつと、もう一度掛けてくれ。

お蔭 (ものも言わず、頭をふる。)

早瀬 よ。(と胸に手を当て、おそうとして、火に触れたるがごとく、ツト手を引く)死ぬ気ぬになつて、と聞いたばかりで、動悸どうきはどうだ、震えている。稲妻を浴びせたように……可哀相かわいそうに……チョツいつそ二人で巡礼でも。……いやいや先生に誓つた上は。——

—ええ、俺は困った。どうしよう。(倒るるがごとくベンチにうつむく。)

お蔭 (見て、優しく擦寄る) 聞かして下さい、聞かして下さい、私や心配で身体からだがすぐむ。(と忙せわしく) 早く聞かして下さいな。(と静しずかに云う。)

早瀬 俺が死んだと思つて聞けよ。

お蔭 可厭いや。(烈はげしく再び耳を圧おさう) 何を聞くのか知らないけれど、貴下あなたこの二三日の様  
子じゃ、雷様より私は可こ恐おそいよ。

早瀬 (肩に手を置く) やあ、ほんとに、わなわな震えて。

お蔭 ええ、たとい弱くツて震えても、貴方の身替りに死ねども云うんなら、喜んで聞  
いてあげます。貴方が死んだつもりだなんて、私や死ぬまで聞きませんよ。

早瀬 おお、お前も殺さん、俺も死なない、が聞いてくれ。

お蔭 そんなら、……でも、可こ恐おそいから、目を瞑ふさいで。

早瀬 お蔭

お蔭 ……………

早瀬 俺とこれツきり別れるんだ。

お蔭 ええ。

早瀬 思切つて別れてくれ。

お蔭 早瀬さん。

早瀬 ……………

お蔭 串戯じょうだん じゃ、——貴方、なさそうねえ。

早瀬 洒落しやれや串戯で、こ、こんな事が。俺は夢になれと思っている。

跡には二人さし合あいも、涙拭ぬぐうて三千歳が、恨めしそうに顔を見て、

お蔭 ほんとうなのねえ。

早瀬 俺があやまる、頭を下げるよ。

お蔭 切れるの別れるのツて、そんな事は、芸者の時に云うものよ。……私にや死ねと云つて下さい。蔭には枯れる、とおっしゃいました。

ツンとしてそがいになる。

早瀬 お蔭、お蔭、俺は決して薄情じゃない。

お蔭 ええ、薄情とは思いません。

早瀬 誓つてお前を厭あきはしない。

お蔭 ええ、厭たまかれて堪たまるもんですか。

早瀬 こつちを向いて、まあ、聞きなよ。他に何も鬱ぐ事はない、この二三日、顔を色あやし怪まれる、屈託はこの事だ。今も言おう、この時言おう、口へ出そうと思つても、朝、目を覚さませば俺より前に、台だいどころ所でおかかを搔く音、夜寝る時は俺よりあとに、あかりの下で針仕事。心配そうに煙管きせるを支ついて、考えると見ればお菜かすの献立、味噌みそ漉こしで豆腐をのど買う後姿を見るにつけ、位牌の前へお茶湯ちやとうして、合せる手を見るにつけ、咽喉のどを切つても、胸を裂いても、唇を破つても、分れてくれとは言えなかつた。先刻さつきも先刻、今も今、優しいこと、嬉しいこと、可愛いことを聞くにつけ、云おう云おうと胸を衝くのは、罪も報いも無いものを背後うしろからだまし打うちに、岩か玄翁げんのうでその身体からだを打碎くだくような思いがして、俺は冷汗に血が交つた。な、こんな思おもいをするんだもの、よくせきな事だと断念あきらめて、きれると承知をしてくんな。……お前に、そんなに拗すねられては、俺は活いきてる空はない。

お薦 ですから、死ぬとおつしやいよ。切れる、別れる、と云うから可厭いやなの。死ぬなら、あい、と云いますわ。私や生命いのちは惜おしくはない。

早瀬 さあ、その生命に、俺の生命を、二つ合せても足りないほどな、大事な方を知つてゐるか。お前が神かみほとけ仏ぼつを念ねんずるにも、まず第一に拝かむと云つた、その言葉が嘘うそでなけ

れば、言わずとも分るだろう。そのお方のいいつけなんだ。

お蔦 (消ゆるがごとく崩折れる) ええ、それじゃ、貴方の心でなく、別れる、とおっしゃるのは、真砂町の先生の。(と茫然とす。)

早瀬 己は死ぬにも死なれない。(身を悶ゆ。)

お蔦 (はつと泣いて、早瀬に縋る。)

一日逢わねば、千日の思いにわたしや煩うて、針や薬のしるしさえ、泣の涙に紙濡らし、枕を結ぶ夢さめて、いとど思いのますかがみ。

この間に、早瀬、ベンチを立つ、お蔦縋るようにつき、双方涙の目に月を仰ぎながら徐にベンチを一周す。お蔦さきに腰を落し、立てる早瀬の袂を控う。

お蔦 あきらめられない、もう一度、泣いてお膝に縋っても、是非もしようもないのでしようか。

早瀬 実は柏家の奥座敷で、胸に匕首を刺されるような、御意見を被った。小芳さんも、蒼くなつて涙を流して、とりなしてくんなすつたが、たとい泣いても縋つても、こがれ死をしても構わん、おれの命令だ、とおっしゃってな、二の句は続かん、小芳さんも、俺も畳へ倒れたよ。

お薦（やや気色けしきばむ）まあ、死んでも構わないと、あの、ええ、死ぬまいとお思いなすつて、……小芳さんの生命いのちを懸けた、わけしりできて、水臭い、芸者の真まことを御存じない！ 私死にます、柳橋の薦吉は男に焦こがれて死んで見せるわ。

早瀬 これ、飛んでもない、お前は、血相変えて、勿もつたい体ない、意地で先生に楯たてを突く気か。俺がさせない。待て、落着いて聞けと云うに！——死んでも構わないとおっしゃったのは、先生だけれど、……お前と切れる、女を棄てます、と誓ったのは、この俺だが、どうするえ。

お薦 貴方をどうするって、そんな無理なことばかり、情があるなら、実があるなら、先生のそうおっしゃった時、なぜ推おしかえ返して出来ないまでも、私の心を、先生におっしゃってみては下さいません。

早瀬 血を吐く思いで俺も云った。小芳さんも、傍そばで聞く俺が極きまりの悪いほど、お前の心を取次いでくれたけれど、——四の五の云うな、一も二もない——俺を棄てるか、婦おんなを棄てるか、さあ、どうだ——と胸つきつけて言われたには、何とも返す言葉がなかった。今もって、いや、尽しんみらいざい未来際、俺は何とも、他ほかに言うべき言葉を知らん。

お薦（間）ああ、分りました。それで、あの、その時に、お前さん、女を棄てます、と

云つたんだわね。

早瀬 堪忍しておくれ、済まない、が、たしか確に誓った。

お蔭 よく、おつしやった、男ですわ。女房の私も嬉しい。早瀬さん、男は……それで立ちました。

早瀬 立つも立たぬも、お前一つだ。じゃ肯ききわ分けてくれるんだね。

お蔭 肯分けないでどうしましょう。

早瀬 それじゃ別れてくれるんだな。

お蔭 ですけど……やっぱり私の早瀬さん、それだからなお未練が出るじゃありませんか。

早瀬 また、そんな無理を言う。

お蔭 どツちが、無理だと思うんですよ。

早瀬 じゃお前、私がこれだけ事を分けて頼むのに、肯入れちゃくれんのかい。

お蔭 いいえ。

早瀬 それじゃ一言、清く別れると云つてくんなよ。

お蔭 ……………

早瀬 ええ、お薦。(あせる。)

お薦 いいですよ。(きれぎれに且つ涙) 別れる切れると云う前に、夫婦で、も一度顔が見たい。(胸に縋<sup>すが</sup>つて、顔を見合わす。)

見る度ごとに面瘦<sup>おもや</sup>せて、どうせながらえいらねば、殺して行つてくださんせ。

お薦 見納めかねえ——それじゃ、お別れ申します。

早瀬 (涙を払い、気を替う) さあ、ここに金子<sup>かね</sup>がある、……下すつたんだ、受取つておいておくれ。(渡す。)

お薦 (取ると齊<sup>ひと</sup>しく) 手切れかい、失礼な、(と擲<sup>なげう</sup>たんとして、腕の萎<sup>な</sup>えたる状<sup>さま</sup>) あの、先生が下すつたんですか。

早瀬 まだ借金も残つていよう、当座の小使いにもするようにな、とお心づけ下すつたんだ。  
お薦 (しおしおと押頂く) こうした時の気が乱れて、勿体ない事をしようとした、そんなら私、わざと頂いておきますよ。(と帯に納めて、落したる鬘<sup>まげがた</sup>形の包に目を注ぐ。

じつと泣きつつ拾取つて砂を払う) も、荷になつてなぜか重い。打棄<sup>うちちや</sup>つて行きたいけれど、それでは拗<sup>す</sup>ねるに当るから。

早瀬 で、お前は どうする。

お薦 私より貴方は……そうね、お源坊が実体じつていに働きますから、当分我慢が出来ましよう。私……もう、やがて、船の胡瓜きゅうりも出るし、お前さんの好きなお香こうこう々々をおいしくして食べさせて誉められようと思つたけれど、……ああ何も言うのも愚痴ぐちらしい。あの、それよりか、お前さんは私にばかり我ままを云う癖に、遠慮深くって女中にも用はいいつけ得ないんだもの。……これからはね、思うように用をさして、不自由をなさいますな。……寝冷ねびえをしては不可いけませんよ。私、山百合を買つて来て、早く咲くのを見ようと思つて、荅つぼみを吹いて、ふくらましていたんですよ、水を遣やつて下さいな……それから。

早瀬 (うつむいて頷うなずいてのみいる、堪たまりかねて) 俺も世帯を持ちちやいな。お前にわかれて、何の洒落しやれに。

お薦 まあ、どうして。

早瀬 それでなくツてさえ、掏賊すりの同類だ、あいずりだと、新聞で囃はやされて、そこらに、のめのめ居られるものか。長屋は藻ぬけて、静岡へ駈かけ落ち落だ。少し考えた事もあるし、当分引込ひっこんでいようと思う。

お薦 遠いわねえ。静岡ツて箱根のもツと先ですか。貴方がここに待っていて、石段を下りたばかりでさえ、気が急せいてならなかつたに、またいつ、お目にかかれるやら。(と

膝にうつむく。)

早瀬 お蔦、お前は、それだから案じられる。忘れても一人でなんぞ、江戸の土を離れるな。静岡は箱根より遠いかは心細い。……ああ、親はなし、兄弟はなし、伯父叔母というものもなし、俺ばかりをたよりにしたのに、せめて、従兄妹いとこが一人ありや、俺は、こんな思いはしやしない!……よう、お蔦、そしてお前は当分どうするつもりだ。

お蔦 (顔を上ぐ) 貴方こそ、水がわり、たべものに気をつけて下さいよ。私の事はそんなに案じないが可ようござんす。小児こどもの時から髪を結うのが好きで、商売をやめてから、御存じの通り、銀杏返いちじょうがえしなら人の手はかりませんし、お源の島田の真似もします。慰なぐさみに、お酌しやくさんの桃割ももわれなんか、お世辞にも誉ほめられました。めの字のかみさんが幸い髪結かみゆいをしていますから、八丁堀へ世話になって、梳手すきてに使ってもらいますわ。

早瀬 すき手にかい。

お蔦 ええ、修業をして。……貴方よりさきへ死ぬまで、人さんの髪を結ゆみましょう。私は尼あねになった気で、(風呂敷を髪あねに姉あねさんかぶりす) 円鬘まるまげに結いって見せたかったけれど、いつそこの方が似合うでしょう。

早瀬 (そのかぶりものを、引手ひつたぐ繰くってつつと立つ) さあ、一所に帰ろう。

お蔭 (外套を羽織らせながら) あの……今夜は内へ帰っても可いの。

早瀬 よく、肯分けた、お蔭、それじゃ、すぐに、とぼとぼと八丁堀へ行く気だったか。

お蔭 ええ、そうよ。……じゃ、もう一度、雀に餌が遣れるのね、よく馴染んで、櫛子

窓の中まで来て、可愛いッたらないんですもの。……これまで別れるのは辛かったわ。

早瀬 何も言わん。さあ、せめて、かえりに、好きな我儘を云っておくれ。

お蔭 (猶予いっつ) 手を曳いて。

いえど此方は水鳥の浮寝の床の水離れ、よしあし原をたちかぬれば、

この間に早瀬手を取る、お蔭振返る早瀬もともに、ふりかえり伏拝む。

さて行かんとして、お蔭衝と一方に身を離す。

早瀬 どこへ行く。

お蔭 一人々々両側へ、別れたあとの心持を、しみじみ思つて歩行いてみますわ。

早瀬 (頷く。舞台を左右へ。)

お蔭 でも、もう我慢がし切れなくなつて、私もしか倒れたら、駈けつけて下さいよ。

早瀬 (頷く。)

お蔭 切通しを帰るんだわね、おもいを切つて通すんでなく、身体を裂いて分れるような。

早瀬 (頷く。)

お薦しおしおと行きかかり、胸のいたみをおさえて立留る、早瀬ハツと向合う。両方お  
もてを見合わす。

實に寒山のかなしみも、かくやとばかりふる雪に、積る……

幕外へ。

思いぞ残しける。

男は足早に、女は静に。

——幕——

大正三(一九一四)年十月

# 青空文庫情報

底本：「泉鏡花集成」ちくま文庫、筑摩書房

1995（平成7）年12月4日第1刷発行

底本の親本：「鏡花全集」岩波書店

1942（昭和17）年7月刊行開始

入力：門田裕志

校正：林 幸雄

2002年2月12日公開

2005年9月26日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 湯島の境内

## 泉鏡花

2020年 7月17日 初版

### 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>